

合唱への道は遠かった（合唱未来論）

秋山日出夫

「八 - モニ - 」NO7 昭和48年4月発行

関東大震災 満州事変 大東亜戦争 終戦 戦後の混乱期、世相の変動に振り回されて、生活への目標さへも定まらぬまま、茫然と過ごして終わった過去を振り返って、淋しい思い出ばかりを残してきた。

希望に胸を躍らせてみた桃色の夢も、その都度灰色に押し潰されて、哀れを留めたものだった。

大きな夢を持て。小学校の先生の愛情にみちた言葉は、私に海軍大将になれよと激励しているように思え、夢は大きく膨らんで、海軍兵学校志望と勉強に熱中した、少年の頃を思い出す。父親（工場経営）の猛反対にあって、工業専門学校へと大転換をよぎなくされる。これで海軍大将の夢もあえなく消え去って終わった。

太平ム - ドの中での学生生活の中からは、素晴らしい夢は生まれてはこなかった。

大正12年関東をおそった大震災は、父をうばい工場を消滅させた。生死の境をさまよいながら私は裸一貫無一物になった。

人生の再出発である。他人の飯の喰い始めで、工場勤めが始まった。日給1円65銭也。これが働いて得た最初の代償であった。工場勤め3年間、八 - モニカ・ボ - イだった音楽好きの私に、合唱への道が開かれた、忘れられない時期となった。工場での新入社員、山口隆俊（同志社大学卒）氏との出会いである。男声合唱が発足したのである。東京リ - ダ - タ - フェルフェラインの誕生となる。

大正15年、楽譜も何も皆目解らなかつたメンバ - は、いい奴ばかりで、世間知らずだった私に、友情の温かさを示してくれたし、歌うことの楽しさに何も忘れて浸りきっていた。

小松耕輔先生の提唱された、合唱普及の働きかけにも、数少なかつた合唱団の一つとして、ボツボツ顔を出すようになって、同好の仲間の数多くいることも知ることができた。

夢にかけたコンク - ル優勝も果たして、気狂と呼ばれるようになったのもこの時代である。

既に工場勤めは辞めて、コロムビア専属になって、男声四重唱を組織していた。

満州事変から大東亜戦争へ混乱期は、国民の生活に厳しくのしかかってきて、一切が戦争一色に塗りつぶされていった。応召が熾烈となって、合唱団の多くは解散していった。東京リ - ダ - タ - フェルも涙を吞んで、一時解散と決めざるを得なかつた。軍歌は国中に氾濫して、クラシック音楽等は肩身の狭い、思いをさせられたものである。

レコ - ド歌手も誰かれの見境も無く、軍の慰問・傷病兵慰問に駆立てられていった。

合唱にかけた夢は、暗黒の中に引きずり込まれて終わった。私に課せられた毎日の仕事は、一隊を組織して軍需工場での、激励・軍歌指導であった。栄養失調の重い身体にむちうちながら、戦闘帽・巻ゲートルの足を引きずりながら、東へ西へと走り廻っていた。無我夢中というのだろう。

疲れても、苦しくとも、激励の演説をぶち、軍歌の音頭をとるとき、五千人一万人の動員された工員・学徒諸君を目の前にして、さかまく波のように盛り上がってくる大合唱を聞く時は、何もかも忘れてがんばり通したものだ。覆いかぶさってくる歌声の迫力、これに負けまいとする私

も命がけだった。

紅潮した若い学徒のまなじりが、火花を散らしてぶつかり合っている。大合唱を通じて感じられる、心と心のふれ合いは身ぶるいするほど尊くも、美しく私の全身を揺さぶり続けていった。心と心のふれ合い、人の声のたくましさ、合唱の極致をうかがい知ったように思えて、高まっていく場内の光景を他に、フット楽しかった合唱の世界に想いを馳せることもしばしばあった。命があったら、生きることができたなら、合唱にかける色々な夢がぼつ然と湧いてくる。

戦争は終わった。大きなショックに虚脱状態になっていた人々も、やっと生気をとりもどして、徐々に活動が始められてきた。合唱活動もいちやくはじめられて工場、職場を中心に、大きな輪を拡げていった。急速な出だしであった。東京リ・ダ・タ・フェルも全員復員の幸せを、歌声に乗せて活躍を開始した。

コロムビアを辞めた私は、又元の木阿弥、裸一貫になった。どうせ死ぬのなら合唱と心中してやる。こんな気持であった。

ある会社から話があって、合唱団を育ててくれと行って来た。飛び上がるような嬉しさであった。月額20円の指導料は足賃だけのものでも、よしやってやる。他に眼をくれない、合唱オンリー - の生活が始まったのである。

戦中苦労の中での体験、大合唱での感激が、もくもくと頭をもたげ出してきた。

合唱する歌声のなかから何かをつかみとろう。希望は明るかった。働く職場合唱団の数が増えて、仲間同志の交流は何にも増して、楽しいものになって来た。食うことにかまけるな、がむしゃらに突入した気持、合唱家！が誕生したというわけである。

合唱団を経験して今日もう50年になろうとしている。随分ながい道中であった。かくあれよと願っていた合唱連盟も、同士の努力が実って社団法人と大きく成長したし、合唱仲間は全国に拡がって、合唱日本を支えてくれている。本当に嬉しいことだ。合唱だけが生き甲斐と考えている私にとっては、人一倍その感を深くしている。

合唱連盟に託してきた私の夢は、朗らかな軽いステップで、次の夢に期待を乗せて飛んでいく。どんな夢をみようか楽しみである。

夢は大きく持つ

子供のときからそう聞かされてきた。正にその通りだと思う。あいつは誇大妄想狂だと笑う人がいたら、言わせておけばいい。小さなことでゴチャゴチャ、ガヤガヤ、ごたくを並べて進むことを知らない輩より、遙かにましである。ジックリ腰を落着けて努力を重ねていこう。夢は大きく拡がってくるものである。

人の声のもつ魅力、しかも大合唱によって醸し出される迫力、美しさ、こんなに素晴らしい芸術はないだろう。そこからはメンバ - 同志の、心の触れ合いをしみじみ味わうことができるし、協力という賜がうかがえる。合唱する心、この心こそ総ての平和への根元と考えている。

未来への夢は駆け巡る

子供がいて、ママがいる、パパも加わりお年寄りも交じる。こんな和やかな合唱グループが日本中にどんどん増えて欲しい。先般水戸市の大会で、家族ぐるみの合唱を聞いて感動した。ご承知のようにママさんコーラス全盛のこの頃である。全国平均の年齢45歳と私は見ている。嬉し

い話だ。皆合唱を通じて家庭の楽しさづくりに張りきっている。やがてはおばあちゃんになるママさん達は、家庭では合唱の道へのリ - ダ - と思っている。子供達がパパになりママさんになって、合唱への友達は大きく広がっていきだろう。

向こう三軒両隣、合唱隣組等できれば万々歳である。合唱人口の減少を嘆いている人が多いようだが、まだまだ合唱の世界は広い。皆で協力努力を重ねていこう。

夢は広がる

家族ぐるみの合唱団。村ぐるみ、町ぐるみの合唱団と、合唱仲間がふくれていって大合唱祭が繰り広げられる。パパのグル - プが登場する。ママのグル - プが美声を聞かせてくれる。お年寄りも孫に交じって花をそえている。

大合唱が聞きものである。合唱の芽はスクスクと伸びて動じることを知らない。ガッチリとした根を下ろしてくれるに違いない。

夢はますますふくらんで

今日は合唱の日(祭日)。官民一体合唱祭典の日である。全国各都市では大パレードが行われて、祝典が華やかに催される。どこの町角でも、ホ - ルでも合唱が高らかに響きわたって壮観である。世界合唱祭も開かれて、親善・平和への祈りを込めて、全世界の仲間達と交流する。素晴らしいことだ。必ず実を結ぶよう努力をしたいものだ。

合唱にかけた夢

こんな楽しい夢を見ている幸せな男

私である。